イスラームにおける信仰と律法

～イスラームの宗教性～

小　田　淑　子

小田でございます。

民族と宗教ということが主題だとお聞きはしていたのですが、「イスラームにおける信仰と律法～イスラームの宗教性～」という、イスラームというものの一番基本の宗教の性格のほうをまず理解していただきたいと思います。その中で民族の問題に少し触れていきたいと思いますけれども、今日の中心は宗教の問題ということでお話していきたいと思います。少し質問の時間を取りますし、質問がでなければ少しまた補足して説明するような仕方にいたします。

まず最初に、日本人とイスラームの関係について。日本ではあまり知られていませんが、日本にすでにイスラーム教徒（ムスリム）が住んでいます。つい先日、たまたま富山でパキスタン人の中古車店の前でコーランが破り捨てられたということがニュースになりました。これはどういう経緯か、今のところはまだ犯人があがっていないはずですけれど、恐らく破り捨てた人間はそれほど大事件になるとは思わずに、単なる嫌がらせのつもりだったかもしれません。ところがこれは、後でもお話しますが、イスラーム教徒にとってはコーランというものは非常に大事な、キリスト教でいうイエス・キリストに匹敵するだけの重要なものなのです。それでムスリムの人たちが怒って、富山のみならず全国から集まって来た、そういう事件があったばかりです。日本人にとってイスラームは非常にわかりにくい宗教で、何かテロだとか、あちこちで戦争をしているだとか、どうも戦争好きの恐ろしい宗教だというのが１つのイメージだと思います。

もう１つは、戒律の問題です。とりわけ日本人は千年以上にわたって、仏教

の一部の出家者を除いて、戒律が普通の人たちの間に入るということがなかったわけです。せいぜいお葬式の時何日か生臭を食べない。だけどお骨上げが終わったら精進おとしをする民族ですから、戒律がわずらわしく、時代おくれに思われる、このように日本人に理解しにくい宗教ですが、それをどう理解したらいいのか。なぜ戒律があるのか、その理由を人間観という根本に戻って考えてみるとわかりやすくなります。そのことを説明します。

こちらはキリスト教系の学校ですが、キリスト教世界とイスラームは歴史的に絡みがありまして、十字軍やリコンキスタの問題がありました。リコンキスタはコロンブスがアメリカ大陸に行った15世紀末ごろに、キリスト教がイベリア半島を再征服したことですが、そのときイスラーム教徒とユダヤ教徒に改宗を迫るか、追い出すかしました。ユダヤ教徒はイスラーム世界へ逃げ帰って、そこで生き延びてきた。今日のニュースからすると、イスラームはユダヤ教と闘ってきた排他的な宗教だという印象をもちますが、近代以前の事情をみれば、イスラームは穏やかな宗教だった。ユダヤ教に対する寛容さはキリスト教よりイスラームの方が大きかったし、信仰の自由を認め、他の宗教との共存関係を確立していたのです。しかし、ヨーロッパにとってイスラームは同じ一神教で近親憎悪みたいなところもありますし、十字軍の頃からルネサンス、コロンブスの時代にかけて、イスラーム世界はヨーロッパより経済文化面で優れていた。コロンブスが西に向かって航海した動機は、従来のシルクロードやインド洋経由の交易ルートではイスラーム世界で関税を取られたため、関税を払わずに香辛料などの交易を望んだことにあると聞きますから、イスラームはキリスト教世界にとって目の上のたんこぶのような存在だったと思われます。しかし、コロンブス以後に状況は逆転し、近代になると植民地支配が始まります。中東はイギリスとフランスがテーブルをたたきながら植民地の境界線を引いたといいます。パレスチナの問題もイギリスがその土地の統治権をもっていたため、ユダヤ民族に自治領として譲ったことに原因があるわけです。このような植民地支配はヨーロッパ人、つまりキリスト教徒がイスラーム世界にずかずか

と入り込んで支配権を振りかざしたことであり、イスラームの人々にはそれに対する反発や憎悪が強い。これは植民地支配を受けた人々に共通する感情で、日本人にはわかりにくいものです。しかもイスラームの場合には、その憎悪の背後に、かつては自分たちの方が上だったのにという自負と悔しさが入り混じったルサンチマンです。たとえば、アラビアのロレンスという映画があります。何度もBSでやっていますからご覧になった方も多いかと思います。その中で、オマル・シャリフが「かつてコルドバに、華やかな文化が輝いていた頃、ロンドンは貧しい寒村にすぎなかった」というセリフがあります。イベリア半島がイスラーム世界だった時代のことですが、そういう意識です。

オリエンタリズムという言葉をお聞きになった方がどれくらいいらっしゃるでしょうか。エドワード・サイードはアメリカのコロンビア大学で文学を教えている教授で、日本では大江健三郎の友人として知られています。そのサイードの本のタイトルがオリエンタリズムで、一時期かなり話題になりました。サイードは実はパレスチナの出身で、そういう立場から、近代以後のヨーロッパでのイスラーム研究にはヨーロッパの文化帝国主義が反映していると指摘したものです。それは政治的軍事的な暴力ではないけれど、学問研究の場にも偏見というより、一種の暴力が入り込んでいることを厳しく批判したのです。このようなイスラームという宗教の基本を次に説明してゆきます。

コーランは全部で114章ありますが、それほど大きなものではありません。岩波文庫で3巻の訳が出ています。ムハンマドが40歳の頃、610年に初めての啓示があったのですが、それまで彼は隊商の商人でした。そんなムハンマドがある時突然預言者にさせられた。これは旧約聖書に出てくる、私は桑の木を耕す者で預言者になるのはいやだといっても、神の選びで預言者になるという話がありますが、それと同じです。ムハンマドはそのことに戸惑いながら、ようやく2年程かかって納得する。その時点で人々に布教を始めて、それが612年です。彼が亡くなるのが632年ですので、ほぼ22年間、ムハンマドは預言者として活躍しました。この期間に断続的に啓示が与えられた。啓示のチャンネル

はムハンマドが生きていた間は続いたが、その死と同時に閉ざされた。もう二度と啓示は得られない。その段階で啓示の断片をすべて集めて記録し、今の形のコーランに編纂されたのが650年頃で、ムハンマドが亡くなって20年から30年以内です。仏典、大乗仏典の成立は仏陀の死後500年くらいで、新約聖書が現在の形にまとめられるには2～300年かかっているといわれますから、コーランは異例に早く正典化（コーディフィケーション）された。

22年間にムハンマドをめぐる状況は大きく変化しました。メッカの初期はごく小さな新宗教の集団でした。その後メッカで少しずつ信者が増えると迫害が起こり、迫害が厳しくなったとき、622年にメッカからメディナへ布教の拠点を移したわけです。これをヒジュラと言い、このヒジュラの年がイスラーム暦元年です。ヒジュラしたとたん、多くの人々が改宗して新しい共同体が成立しました。ムハンマドが生きていた間に、大半が砂漠ですから人口は知れていますが、アラビア半島ほぼ全域にイスラームが広まりました。その後150年ほどで、中央アジアからイベリア半島までものすごいスピードで布教が成功し、イスラームは広まりました。非常に成功した宗教でした。コーランはムハンマドが預言者となってから死ぬまでの22年間の状況がある程度反映されています。啓示の内容を年代史にそってその変化を見ることも可能なのですが、ここでは啓示の時期を考えずに、コーランの全体を一まとめの教えとしてその内容を見ていきたいと思います。

コーランの内容は詳しく話すときりがありませんが、私はレジュメに示したように、創造から終末と来世に至る歴史にそって5つのテーマに分類しています。創造、過去の預言者への言及、ムハンマドへの啓示、終末と神の裁き、来世の天国と地獄の5つです。基本的な事柄はキリスト教と同じで、神が世界（現世）とその一切の存在者を創造した。イスラームの面白いところは過去の預言者に言及があることです。イスラームではアダムも預言者の一人とされ、ノアもアブラハムもモーセも、そしてイエスも預言者として数えます。イスラームは三番目の一神教で、過去の預言者はすべて同じ唯一神アッラーから基本的に

同じ啓示を受けたと見ています。違いがあるとすれば、それはユダヤ教徒やキリスト教徒が啓示の一部を隠したり、歪めたからで、キリスト教は預言者にすぎないイエスを神の子だとみなす過ちを犯していると考えています。しかし、一応啓示を受けとめ神を信じているとして、たとえイスラームを嘲笑して改宗しなくても、不信仰者とは見ずに「啓典の民」として扱います。そしていよいよムハンマドへの啓示があります。むろん創造から来世までのコーランの内容すべてがこのムハンマドへの啓示に含まれているわけですが、ここでの分類では、ムハンマドへの啓示には、その時々の状況や出来事や、礼拝の仕方など具体的な規範がここに含まれています。コーランではムハンマドの死後にイスラームがどう展開するかには何の予告もありません。未来の現世、世界情勢に関する予告はまったく語られていません。コーランでは一挙に終末が到来し、終末の裁きが行なわれ、そして来世の天国と地獄の有様が具体的に生々しく描かれています。

コーランが強調する終末について見ていきます。人々はムハンマドに終末がいつ来るのかと尋ねたが、ムハンマドは「私にはわからない。直ぐかもしれないし、ずっと先かもしれない。ただ神の約束だから必ずくる」と突っぱね、いつという予言はしませんでした。終末が到来したときの状況は非常にリアルにヴィヴィッドに描かれています。天が落ち、星も落ちる。大地はグニャグニャになり、山は綿毛のように飛んでゆく。これは一切の自然界の秩序が崩壊する宇宙的カタストロフィーです。生きている人間は終末の裁きの場へ引っ張っていかれるし、かつての死者たちがムクっと身体ごと甦って裁きの場へ引立てられていく。裁きは神が一人一人に尋問をする。「お前のところに預言者が来ただろう。彼を信じたか、信じなかったか。彼を嘘つき呼ばわりしなかったか」などと。一人ずつの行状のすべては帳簿に記録されており、それで裁かれて、その結果天国か地獄かへ送られる。コーランには天国と地獄（ジャンナとジャハンナム）だけで、煉獄という観念は、後のイスラームには出てきますが、コーランでははっきりしません。イスラームの終末と来世は現世が終わった後に始まるわけですから、現世が続くかぎりまだ来世は存在しない。すると死者はど

こにいるのかという問題が生じます。コーランでは死んだら骨になって、終末であっという間に甦るとしか書かれていませんが、ムスリムとして死んだ者は墓の中で小さな裁きを受けて天国へ仮住まいさせてもらい、終末に裁きをうけることになるという考えが定着していきました。

コーランについてイギリスの作家カーライルは「つまらない、退屈な書物だ」と言ったそうですが、コーランの叙述は非常に人間臭く、人間の心理を鋭く捉えており、考えようによっては非常に面白いものです。終末の裁きに臨む人や天国や地獄に住まう人々が目に見えるように描かれています。天国にいる人々が「よく分からなかったけど、信じておいてよかった」と言い、地獄では「あの時お前が信じるなと言うから、信じなかったが、えらい目にあった」と炎に焼かれながら嘆いている。来世は本来霊的な世界ですが、コーランの叙述はあまりにも身近で、人間臭く、霊的世界という印象が薄れます。私も最初はこのような叙述に違和感がありましたが、最近は違ってきました。信仰は何も特別な人間ではなく、ごく普通の人間の問題なのだということをうまく表現しているのではないかと思うようになりました。すぐ後で詳しくお話しますが、イスラームは全員在家の宗教です。普通のサラリーマンや家庭の主婦が同時に信仰者であることを求める宗教です。宗教は決して特別に精神的な人の問題ではなく、ごく普通の身近な人の問題なのだということです。天国や地獄の人々の会話はあまりにも安っぽいのですが、それは私たちと等身大の人間たちの行く末かもしれません。

次に、イスラームにおける神と人間の関係を説明します。イスラームの特異性であり、キリスト教との違いは、神と人間の間にイエス・キリストに相当する特別な人格が存在しないのです。イエス・キリストの代わりがコーランです。キリスト教では神の言葉、ロゴスの受肉と言いますが、コーランは神のロゴスのアラビア語化です。神と人間の間にあるものは言葉だけで、それを伝えたムハンマドの人格には特別な意味はありません。まさにメッセンジャーで、言葉を伝える使徒にすぎません。彼には人を救える能力はない。神はそんな権

能を与えていない。「お前は警告だけをすればいい。お前の力で誰かを信徒にしてやりたいと思ってもそれはできない。神にはできるけど、お前にはできない」とコーランにあります。信仰するか否かは、神の啓示を聞いた人、一人ひとりの決断にかかっているのです。人間は神の言葉に応答しなければなりません。イスラームでは神と人間の間に啓示の言葉しかありませんから、神がまず啓示を与え、人はそれに応答するのです。信じるか否かの二者択一、あれかこれかの決断を迫られます。

ところで、コーランの内容はすべて信仰への誘いであり、なぜ信仰しなければならないのかという理由の説明でもあります。私たちは知識としてコーランはムスリムにとっての聖典であり、真理だと理解していますが、ムハンマドが生きて啓示を語り伝えていた時には、聞き手はまだムスリムではなかった。ジャーヒリーヤを生きていたアラブ人で、彼らの世界観からすると嘘、作り話としか思えない内容を聞かされて、それを真理だと信じろと迫られたわけです。しかし、ただ信じろとだけ迫られたのではなく、その理由、根拠が説明されているわけです。すでに神が創造した世界に存在して、神の大地で育った食物を食べている。その真理をジャーヒリーヤ時代の人々は忘れていたが、啓示が届いてその真理が開示された以上、信じるのが当然で、神に帰依することは特別な者になるのではなく、まっとうな人間になることに他ならない。神と人間の本来の関係に立ち返ることに他ならない。過去の出来事や現存する世界については確かめようもありますが、未来の終末と来世は確かめようがなく、啓示を信じるしかない。信じた者には天国が約束されるわけで、啓示は福音となりますが、信じない者は地獄へ落ちるわけで、啓示は警告なのです。ムハンマドはこの警告と福音を伝えるだけで人々を信仰へと導く。救済能力はない。信仰の決断は聞き手に委ねられています。神と人間の間に介在する特別な人格は存在しないのであり、ただ啓示の言葉だけを介して神と人とが直面している状況です。実はもう一度神と人は一対一で直面します。それが終末の裁きの場面です。終末には、人間が啓示への応答の記録をもって神と直面し、その応答の結果に対して賞罰が与えられるのです。つまり各人がどれだけ啓示の言葉に

従った人生を過ごしたか、あるいはまったく啓示を信じずに過ごしたか。終末の裁きで、各人の人生は信仰の面でも行為の面でもすべて暴露され、啓示への答えとして神によって評価、判定されるのです。このように見てくると、イスラームでは神と人間がコーランの言葉だけを介して直面する関係であることがお分り頂けるかと思います。それだけに、ムハンマドの人格ではなくコーランが大事なのです。

ちなみにイスラームの場合、神の像やムハンマドの像は一切作りません。どこにもありません。仏教もそうですが、神や仏は目に見えるものではない。基本的にそうですが、何か目に見える形で感覚に訴えるものが、神を忘れないために必要なのだろうと思います。ですからいったんできると大事になってきます。イスラームでは像の代わりにコーランの読誦があります。しょっちゅうコーランが聞こえるわけです。目に見える姿ではなく、まさに神の言葉がムハンマドを通じて聞くように、お前は信じるかと問いかけてくる。ビジュアルで訴えるのではなく、聴覚を通じて神を思い出させる。そういう宗教だと言えます。

イスラームの人間観は基本的にヘブライの人間観に近いと言われています。キリスト教の場合、霊と肉の対立はどちらかと言うとギリシア的な観念の影響だと聞きます。コーランでは神が精神と身体の統合として人間を創ったわけで、決して身体を卑しいとは言っていません。コーランの中には人間の創造について、土くれに息を吹き込んだという旧約聖書と同じ表現もあるのですが、性の営みによって赤ちゃんが生まれる過程を叙述した箇所もあります。精液が母親の胎内へ入り、その一滴から血の塊を造り、それが少し大きな塊となり、そこから骨を造り、骨に肉を着せるなど、神が創造に継ぐ創造を行なって赤ちゃんを生み出す。この表現を読んで身体が卑しいという気がまったくしない。まさにその通りだという気がします。胎内にいるときは胎盤から呼吸しているのが、オギャーという産声で肺呼吸に切り替わるわけですね。それはすごいもので、神の業によってできるということを感じます。このような身体観があり、男と女に作られて性的な欲望があることも当たり前で、パンによって生きるの

も当然。パンを稼ぐ経済活動も当然のこととして認めています。

ところで、キリスト教や仏教でも同じですが、神と直面する個人は誰とも代わり得ない存在です。キェルケゴールが言った単独者です。本当の意味での一人は神と直面したときなんですね。私たちは日常生活の中で自分を取り繕ったりして、いろいろごまかしているからです。先ほど話しましたように、イスラームでも神と直面する個人という観念ははっきりしていますが、イスラームの特徴は単独者である人間が同時に身体的に社会の場で経済活動をして家庭を営んで暮らしていること。神と直面する個人と社会的な生活者が別ではないことをイスラームは強調します。身体を卑しまず、身体的欲望を認めるがゆえに、過度の禁欲つまり独身や出家は必要ないのです。修道院はキリスト教が勝手に作ったもので、要らないとコーランにあります。逆に言うと、社会全体が修道院ではないかという言い方も成り立つのですが、信仰者が普通に結婚生活をして経済活動をすることを当然のこととして認めるわけです。

次にウンマについて説明します。ウンマはイスラーム的共同体と訳すべき言葉で、信仰の共同体です。それはイスラーム以前の血縁、地縁的な部族社会を断ち切って成立する、信仰を絆とする信仰者の共同体です。この意味で、呼び出された人々の共同体、エクレシアと同じです。部族が異なっても、肌の色が違っても新しい信仰の共同体の一員になれる。これは仏教やキリスト教にも共通です。キリスト教の場合、イエスはまもなくこの世は終わり、やがて神の国が訪れると信じており、この世で存続することは考えていず、この世に責任をもつことも考えになかった。最初のエクレシアはこの世にあるが、この世のものではないといわれていますが、それはキリスト教徒たちがローマ帝国の領内にあって「神のものは神に、カエサルのものはカエサルに」という原則で暮らしていました。信仰を捨ててはいけないが、ローマの皇帝に税金を払うことも拒まないわけです。いわゆる教会と国家の分離という原則です。イスラームにとっても信仰は精神の問題です。しかし一人の人間が信仰するのですから、信仰の精神だけがどこかを浮遊することはあり得ないわけで、一人の身体を伴っ

た信仰者がいるのです。そうすると、その人がどこでどのように暮らすのかということが問題になってきます。イスラームも世界宗教ですが、キリスト教や仏教のように精神性を強調して、教会と国家の分離が世界宗教の特徴だとすると、イスラームのウンマは捉えられなくなります。イスラームは信仰の精神を重視するけれど、信仰者の家庭生活や経済活動も信仰の精神と同じ原則で営むことを要求する宗教なのです。初期のウンマはメディナを中心に広がりつつあったのですが、そこでムスリムが結婚したり、誰かが死ねば相続問題が生じる。ムスリムとなった以上、かつての部族の慣例に従うのではなく、新しくコーランによって定められた規則に従うことを要求したのです。ウンマでのムスリム同士の結婚や相続、商取引などの社会規則を新しく作っていったのです。一言で言えば、ウンマはイスラームの信仰の共同体であると同時に、ムスリムの生活共同体でもあり、その統合としてのイスラーム的共同体なのです。

ムスリムになるにはむろん精神的な改宗が必要ですが、それだけではなく、生活慣習なども新しいウンマの規則に従うよう変えなければなりません。宗教は全人格的なもの、生き方のすべてに関わるといいますが、たとえば明治時代の日本でキリスト教に改宗した人々は日本の法律や慣習に従ったわけですし、かつて仏教が日本へ入ってきて、日本人が仏教徒になっても、神社は残り、先祖崇拝などもそっくり残りました。これは仏教が仏教徒の生活規則には何も口出しをしなかったからでしょう。コーランの中にウンマ・ムスリマという表現が一度だけ出てきます（2：124）。これは神に帰依したウンマという意味で、単に「ムスリムたちのウンマ」以上の意味が含まれていると解釈できます。ウンマの成員であるムスリム個人が神に帰依することは必要条件ですが、ウンマ全体が神の意に適っているためには社会秩序が整っていなければなりません。それには、個人の良心だけでは不確実で、何か法的な規範が必要です。ニーバー（R. Niebuhr）に Moral man and immoral society（『道徳的個人と非道徳的社会』）という著作があります。ウェーバーの用語ですが、心情倫理は個人の良心であり、動機が清ければ結果が失敗であっても倫理に適っているとする倫理です。それに対して、政治には動機の清さよりも結果を重視する倫理、結果に

責任をもつ責任倫理だとウェーバーは説明しました。ニーバーは個人が心情倫理を充たしていても非倫理的社会しか成立しない場合を指摘しています。ウェーバーもこの両者の統合をある程度考えていたようですが、なかなかむずかしいようです。ウンマ・ムスリマには心情倫理と責任倫理の双方が必要であり、シャリーアはこの二種類の倫理を一つの規範体系に統合していると考えることができます。ポール・リクールは赦しの倫理と司法の倫理という表現を用いて宗教的な倫理と法律の倫理の両者が必要だと説明しています。赦しの倫理はイエスによる罪の赦しです。赦しは大切ですが、それだけでは社会生活はできない。たとえば、「今日から交通法規をなくすので、交通違反による罰則もありません、だから赦しの精神でお互い譲り合って運転して下さい」と言っても、誰かが暴走すれば、それでも赦し合いの精神だけで混乱が治まるかといえば、無理でしょう。

イスラームは人間の欲望を非常に素直に認めています。動物は本能で欲望をコントロールしますが、人間の欲望だけが異様に肥大するのです。ライオンはお腹がいっぱいだと目の前を餌が通っても食べません。ところが人間はお腹がいっぱいでも、「ケーキがあるよ」と言われれば食べるわけです。人間だけが生きるのに必要なエネルギー以上を食べてはダイエットしています。本来子孫を残すための性も、人間は快楽を目的とする場合が多く、動物としては異様な性となっています。そんな中で不倫も起こります。このとき良心だけでやっていけるかというと、そうではない。イスラームはこれらの問題を宗教の問題として扱います。ですからイスラームの律法には結婚や相続など生臭い問題が含まれるのです。コーランの中に、しかも読誦される聖典の中に、誰とは結婚してもいいが、誰とはやめておけ、離婚は三回まで、離婚する時は結納金を返すことなど、ずいぶん下世話なことが書いてあるのです。最初は私もびっくりしました。日本人にはやはり違和感があるでしょう。それは日本人にとって宗教とは出家のように俗世間を離れたところにあると思っているので、このような下世話な話に嫌な気がするのでしょう。しかし、宗教が精神と身体の統合である人間の問題だとすれば、イスラームの考え方は人間を美化せず、等身大に捉

えており、決して非合理ではなくむしろ一つの当然の形ではないかと思っています。私もイスラームを勉強し始めた頃、聖典の中に銭金や性の問題が赤裸々に出ていることに抵抗がありましたが、最近は次のように考えています。週刊誌のスキャンダルの大半はセックスと金にまつわるトラブルです。いかに多くの人間がその問題で間違いや犯罪を犯してきたか分かります。たとえば、あの家が相続でもめるとは想像できなかったという話をときおり聞きます。金がない時、人は争いません。目の前に何千万円というお金や土地が自分のものになるかもしれない状況で初めて、兄弟が争うのだと思います。コーランはそういう弱く卑しい人間を鋭く捉えており、あらかじめ規範を与えているのです。

続いてシャリーアににについて説明します。シャリーアの元来の意味は道、水場に至る道です。シャリーアの理念は信仰や帰依の精神です。イエスが「私は道である」と言い、仏教でも仏道、マーガという言葉があります。宗教にとって「道」はなかなか含蓄の深いもので、日本では茶道とか華道、あるいは武道でも術よりは道を用いて表現することが好まれるようです。これらの道には精神が一本通っていますが、精神だけではなくて、そこを歩むという実践や訓練を伴うという意味合いが含まれています。日本では人の道という表現がありますが、人の道は必ずしも細かい行為規範に分節されていない。それは単なる精神ではなく、行為の基盤にある精神を意味している。シャリーアにもその精神はあり、信仰や帰依の精神がそれです。ところが、シャリーアは詳細な行為規範に分節されています。先ほど言いましたが、人間を精神と身体の不可分の統合だと捉えるイスラームでは、信仰の精神は暮らしのすみずみに及んでおり、具体的な行為や振舞い、生き方全体と切り離せないのです。そこで、シャリーアの場合は帰依の精神の道を具体的な行為の仕方や行為規範に分節したと考えることができます。シャリーアには礼拝や断食などの儀礼の規範と日常の社会生活の行為規範が含まれており、また先ほどお話しましたように、心情倫理と責任倫理の双方を共に含んでいます。イスラーム法と訳されることがありますが、現代の私たちが考える法律よりずっと多様な行為を含み、心情倫理や行儀

作法さえ含んでいます。コーランの中にもかなりの数の儀礼の規範や社会規範が見られます。ただし、コーランは決して法典でも法律書でもありませんから、規範の前後に神の創造や終末が説明されていることも多いのです。

ここで少し、信仰と行為の関係に触れておきます。キリスト教でも、業による救いか、信仰による救いかが議論されてきました。コーランの中では「信仰して、善行せよ」というように、信仰と善行が対になって出ています。このことは信仰と行為が一対であって切り離せないことを意味すると同時に、二つの用語で示されている以上、信仰と行為は全く同じとは言えないことを示唆しています。信仰は心の中のもので、神にしか見えないのですが、行為は外から見えるものです。ですから、確かに人間はずるいもので、行為の面でごまかすことができます。たとえば、信仰心がないのに礼拝することができるのです。信仰心がないのに、形ばかり祈っても仕方がない、そう思っている人は結構多いと思います。私も若い頃はそうだったし、お茶やお花を一切習いませんでした。形を覚えなければならないことが大嫌いで、つまらないと思っていました。けれどイスラームで行為を重視することを考えてみて、今になって、型からはいる大事さをわかったような気がしました。信仰心もないのに、祈ってどうなる。その通りです。しかし、どこでその信仰心を養うかという問題が残っています。そのとき、ともかく形から入っていく。一日５回の礼拝に慣れていくのです。一日五回の礼拝は煩わしいようにみえますが、イスラームのように在家の生活を認めると、いろいろなことに気が散じます。生身の人間が生きていく以上、お金のことも人間関係も考えなければなりませんし、あっちこっちに気持ちが散らばってしまいます。だから、一日５回でいいから神に集中しなさいというわけです。律法が多いというと、日本人はすぐに人間にはそんなことはできないと言ってしまいますが、イスラームでは逆に、信仰心なんてそんなに立派に続くものではない、しかも世俗のことに気を散じている人間が神のことばかりに集中できるわけがないと捉えており、むしろ心の弱さがわかっているような気がします。

ムスリムにとって義務である儀礼行為の一部を簡単に説明します。まず、一日５回の礼拝をサラートと言いますが、これは神に何か頼みごとする祈りではなくて、「アッラーフ・アクバル（神は偉大なり）」で始まり、偉大な神を称えて、私は下僕であることを確認することです。その確認を毎日５回するわけです。またラマダン月に一ヵ月間断食をします。これは日の出前までに食べておいて、日の出から日の入りまでが断食で、厳格な人は唾も飲み込まない。イスラーム暦は太陰暦ですから、少しずつ季節がずれます。冬の断食は日も短いですし、楽ですが、夏の断食は暑いし、日の長さも長く、つらいものです。断食の一つの理由は、飢えている者の苦しみを味わうことだと言われています。断食は現代でも毎年行なわれており、日本人にはそんな厳しいことができるなと感心しますが、確かに、金持ちも飢えの苦しさを否応なく経験することはすごいことだという気がします。ちなみに、断食は基本的に健康な大人の義務であって、妊婦および授乳中の母親や病人等は免除されるなど、細かい配慮がなされています。次は、一生に一度行なえばよいメッカ巡礼です。一家のうちで世帯主だけがメッカ巡礼することが多いのですが、留守中に妻子が飢えてはいけないという配慮があります。だから借金がある人はメッカ巡礼に行ってはいけないとシャリーアで決まっています。そうすると、日本人ムスリムで、行きたいけれど家のローンがあって…、家のローンは今妻子が飢えるわけではないけれど、法に抵触するから行けないといっている人がいると聞きます。逆に遠いところからメッカ巡礼に行く場合、ものすごくお金を貯めていかなければならないかというと、そうでもない。商売をしながら行ってもいいのです。ちょっとした資本で前の町で仕入れたものを売って、一部ホテル代にして、その残りをまた資金にして次の町で売って、商売しながら行ったら小さな資本でいけるわけです。ただしメッカのここまできたら、もう商売はやめて巡礼に徹しなさいと。そして帰りはまた商売しながら帰ってもいいという、そのような配慮がなされています。

あまり詳しく説明することはできませんが、シャリーアが体系化されていく

過程とウンマの制度の関係について簡単に触れておきます。シャリーアの第一の源泉はコーランです。コーランの中にかなりの具体的な規範がありますが、それだけでは不充分でした。それを補ったものが預言者ムハンマドの指示の言葉や実際の行為と行動です。預言者の模範的な言葉と行為をスンナといい、その記録、言行録をハディースといいますが、これは啓示とは別に徐々に集められて、コーランに次ぐ聖典になりました。その他にシャリーアにはイスラーム以前のアラブ社会の慣例がかなり取り入れられています。宗教としてはイスラームとジャーヒリーヤは水と油で混ざる余地はありませんが、イスラームが具体的に歴史の中に根付いていくとき、コーランの原理だけで抽象的に社会を組み立てたわけではない。既存の社会の色に染まらざるをえないわけです。その意味ではイスラームとジャーヒリーヤは連続性をもちます。さらに、ウンマの人々の合意があれば法にしてもよいという原則もありますし、コーランや預言者のスンナを再解釈して法を定めていくといった方法で、次々に法を引き出していきました。たとえば、コーランは葡萄酒を禁止していますが、ではビールはどうか。そのときコーランが葡萄酒を禁止している理由を探ると、それが人を酔わせるからだと分かります。すると、ビールは葡萄から作られていないけれど、人を酔わせるからだめだということになります。

一番分かりにくい問題が、イスラームにはいわゆる教会制度がないことです。分かりやすいのでカトリックを例にしますと、バチカンという目に見える建物があって、法皇を頂点とする聖職者のヒエラルキーがあるわけですね。イスラームにはモスクがありますが、モスクは礼拝所、お祈りをする場所ですが、祭壇や神の像は一切ない非常にシンプルな空間です。イスラームにはバチカンに相当する制度はありません。ではイスラームはどのようにして存続してきたのか、分かりにくいですね。ちょっとむずかしいかもしれませんが、ウェーバーのカリスマ論と制度化論を使って説明します。キリスト教の場合、イエスがもっていたカリスマは、彼が死んで復活して救世主となっただけではなく、イエスの救済の力は教会と聖職者に移行していきます。イエスがもっていた人格的カリスマが職業的カリスマと教会制度に移行したと考えられています。イスラー

ムの場合、人々を救済する力をもつ聖職者はいませんし、教会制度もありません。イスラームの場合、ムハンマドが生きていた時から、彼が伝えたにもかかわらず、コーランはムハンマドより上位の権威をもっていたのです。その権威は現在も変わりません。ムハンマドにはイエスのような人々を救済する力は与えられていなかったため、救済の力をもつ聖職者もいないのです。ウェーバーは人格的カリスマが制度に移行すると考えて理論を立てましたが、イスラームではコーランがムハンマドの人格以上の権威を保っていることが変則的なのです。

コーランにはかないませんが、ムハンマドにも創唱者としてのカリスマはありました。それはコーランの解釈権であり、ウンマの指導者としての権威です。イスラームではムハンマドのもっていた権威がカリフと法学者とスンナに分かれて移行していったと考えることができます。ムハンマドが生きていた時、啓示以外に彼が命令や指示をしたこともあり、それは広い意味で彼がコーランを解釈したことです。彼の言行録がやがてスンナとハディースになり、コーランに次ぐ聖典になったように、ムハンマドの人格ではなく、言葉と行為の記録がやや神格化されたとも考えられます。ムハンマドがもっていたコーランの解釈権は後の法学者に移行しました。ムハンマドの活動で目立ったものはウンマの指導者としての手腕でした。ムハンマドは宗教者であると同時に、政治家、軍事指導者でもありました。日本人は宗教者が政治家であるとか、まして軍事指導者だと聞くと嫌悪感をもつ人も多いでしょう。先ほど言いましたように、ウンマはこの世の社会秩序であり、領土があってそこでムスリムが暮らすことのできる共同体です。その秩序を確立するために、ムハンマドはメッカの勢力とも戦ったし、努力もしたのです。ムハンマドが死んだ後、その後継者がカリフという称号をもち、カリフ制度が始まりましたが、カリフはムハンマドがもっていた行政権と軍事権を引き継いだのです。しかし、ムハンマドのすべての権限がカリフに集中したのではなく、コーランの解釈権は法学者に委ねられていったのです。ちなみに、法学者はイスラームの聖職者ではないかといわれます。聖職者の定義によってはそういえます。法学を職業として、寄付などで生

活できた人もいましたから、その意味では法学者は聖職者ですが、救済の権限はもっていません。

イスラームの制度化、ウンマの制度化を考えるなら、カリフ以上に、シャリーアの体系化と法学者の判断が重要なのです。イスラーム世界とはシャリーアが施行されている地域であり、シャリーアの施行には法学者が不可欠なのです。イスラーム世界には次々と国家ができて、カリフ以外にも政治の実権を掌握した者が出てきましたが、彼らがシャリーアに基づく政治を行なうかぎり、ウンマの指導者でありうるわけです。歴史的に見て行くと、実際はさまざまな政治の形態がありますし、むずかしい問題が出てきますが、宗教の制度としてイスラームを理論的に考えるなら、シャリーアによる統治を挙げることができるかと思います。

最後にごく簡単に近代の問題に触れます。イスラームにとって近代はヨーロッパ列強が中東に侵略を始め、一部で植民地支配が始まってからです。つまり、西洋の衝撃を受けた時から始まります。これは日本と同じで、黒船と大砲にびっくりし、これは大変だと改革に取り掛かります。まず近代的な武力、それを作って扱うための科学技術の導入と受容、そのために必要な教育制度を整えること、これが日本でもイスラーム世界でも近代化の共通の目標でした。西洋に追いつき、対等になり、追い越すには、それぞれの伝統的な政治社会の制度を改革しなければならないことに気づいたわけです。ところが、日本とイスラーム世界との大きな相違は、日本では西洋の諸制度を導入する場合、仏教も神道も直接に反対や口出しはしませんでしたが、イスラームにはシャリーアがあり、社会制度の改革ではシャリーアをどうするかが問題にならざるを得ませんでした。ごく簡単に言いますと、イスラームの近代化には一方で西洋の法体系、社会制度、教育制度などの受容と、他方ではイスラームそれ自体の改革という二つの目的がありました。イスラームの改革は、コーランの近代的解釈、つまり科学や理性の重視がコーランの精神に矛盾しないこと、むしろコーランは理性の積極的使用を進めていることを明らかにすることが一つで、もう一つ

は近代にふさわしくシャリーアを改革することです。イスラーム世界の近代化のためには、どちらか一方ではダメで、両面の改革が共に進展することが必要だと考えられていましたが、結局は二つの路線に分裂して進んでいったのです。

一方は日本の近代化のように、西洋の諸制度を積極的に取り入れて、イスラームは個人の信仰の次元では尊重するが、社会制度は西洋的近代でやっていくという路線です。これを一応世俗主義と名づけると、トルコがその典型的な例です。この路線に対してむろん反対が起こります。イスラームは人間を精神と身体の統合とみて、信仰と社会生活を切り離すことなく、コーランに基づいて社会を築いてきたのに、世俗主義はイスラームを尊重すると言いながら、信仰を精神の次元に棚上げして社会から切り離した。これはもはやイスラームではないという非難です。だからイスラームの原理に基づいた近代化が大事で、欧米のような政教分離は認めない、イスラーム的近代はシャリーアに基づくものでなければならないと主張した。これがいわゆる原理主義路線です。この路線はサウディアラビアやホメイニによるイラン革命がその代表です。

イスラームでは原理主義を復興主義と呼びます。それはムハンマドが活躍したイスラーム初期に実現した理想のイスラーム社会を復興しようとするものです。復興（原理）主義もシャリーアを改革しようという目標をもっているのです。復興主義からすると、近代の民主主義や平等の理想はコーランにちゃんと書いてある、だからコーランを正しく解釈すれば、イスラームの近代を実現できるのであって、なんでそれをキリスト教から教えてもらわなければならないのだというわけです。だけど、結局はコーランの字義的な解釈に終始して、男性と女性を隔離したり、女性にベールの着用を義務づけたり、女性差別を助長するような解釈が目立って、なかなか成功していないのも事実です。これはコーランの字義的解釈しかできなかったことにもよりますが、復興主義者たちに反欧米、反米的な姿勢があったことにもよるような気もします。復興主義も近代を否定してるのではなくて、近代化したいわけで、科学技術などは取り入れようとしています。肝腎の社会改革がもたもたしているように見えますが、要は

何も西洋的近代だけが近代ではなくて、イスラーム的近代を求めているのです。

ここで日本の近代化と比較して見ると、日本ではさっさと西洋近代を取り入れた。むしろ西洋に憧れをもって取り入れたとすると、それは日本が苛酷な植民地支配を受けなかったことが大きいでしょう。けれど明治以来100年以上経って、日本がどれだけ西洋化したかというと、けっこう日本的なものを残しています。科学技術や教育、それに服装や音楽などはかなり西洋的なものになっているけれど、社会のあり方にはまだまだ日本的なものが残ってます。私は、イスラームもどんどん西洋的なものを取り入れても、イスラーム的なものは必ず残るだろうし、心配することはないように思うのですが、イスラームは近代化の入口のところで、西洋的近代化かイスラーム的近代化かを議論して、足踏みしているように見えます。イスラームにはイスラームの原理、信仰と社会の統合という原理がしっかりしているだけに、日本のような無節操なやり方はできないのでしょうし、それが間違っているとは思いません。原理や理念のことはほとんど考えず、無節操に西洋的近代化に突っ走ってみて、まだ日本的なものを残している日本と対照的です。そういう問題を論理的に考えつめないことは日本の良さでもあり、欠点でもあるでしょう。このイスラームという非西洋世界の近代化をめぐっての苦悩や戸惑いをみていると、日本の近代化とは何だったのか考え直すとてもいいヒントが与えられます。日本もイスラームとは異なる非西洋世界には違いないのですから。日本はこれだけ近代化に成功しながら、これだけ日本的なのはなぜか。これはまだまだ考えてみなければならないと思います。少し長くなりましたが、ここで終わります。

司会者　どうもありがとうございました。今回私たちのテーマは民族と宗教ということで、今年度はまずイスラームの基本的な理解を踏まえて、そして今日のいろいろな問題に対する一つの示唆を与えられようという主旨で、今日は小田先生をお迎えしてお話をいただきました。とりわけキリスト教との比較を話の中に入れてくださって、非常に明解な形でお話くださいました。ご質問・ご

意見がございましたらお答えいただく時間を設けたいと思います。どうぞどなたからでも結構ですので、お手をあげてお話ください。

質問　お話をありがとうございます。二つ質問したいと思います。一つは先生が強調なさったように、イスラームで一般的な法、あるいは社会的な倫理が、財産やお金やセックスの問題などを非常に現実的に教えているという、それはそうだと思うのですが、その前に、例えばキリスト教ですと、神が愛したようにあなたがたは愛しなさいというようなかたちで、信仰があって信仰から倫理がでてくるというその関連を重視するわけですが、今のお話を聞いていますと、その信仰と行為をイスラームは重視する。その信仰の中身と現実的な社会生活のその倫理との関係ですね、それがどうなっているのか、というのが第一の質問です。第二番目は、ウンマが非常に大切だという、それはそうだと思うのですが、ただ現実にはコーランであれ、そのいろいろな解釈で具体的には支配者がどうするかということにかかっているとおっしゃったのですが、例えばイランならイラン、トルコ、アルジェリア、それぞれのイスラームの共同体の違いがあると思うのですが、そのイスラーム同士ではそういう現実の相違といいますか、違いについてどういうふうに考えているのかという点、二つ、お願いします。

小田：なかなか難しい質問がでました。まず信仰と倫理の関係ですね。確かにキリスト教は倫理を重視する宗教で、それに対して仏教ではあまり倫理を強調しません。イスラームの場合、シャリーアという規範体系の一部に倫理が含まれているわけでして、儀礼に関する規範、また法律のような規範や食物に関する生活規範も含めた規範体系の一部で、倫理だけが強調されることはあまりありません。イスラームにとって信仰とは啓示の内容を信じ、それを与えた神の存在と神の約束を信じることであり、基本的には神への帰依です。コーランに神の慈悲は無数に出てきますが、神の愛はほとんどみられません。今のご質問を受けて考えてみると、イスラームでは神の慈悲を受けて存在しているのだか

ら、他者へ慈悲を与えなさいといった言い方はしません。先ほどお話しましたように、信仰している一人の人間が身体的に社会の場で生きている。信仰の精神と身体的な生き方は分離できないわけで、信仰の精神が生き方のすべてに表現されていなければならないことになります。それも、個人の信仰心と良心にしたがって、その場その場で個人の判断で行為するだけではなく、ウンマ全体の秩序が維持されるためには、法的な規範が必要だとしてシャリーアが体系化された。ムスリムはそれに従って生きるということで理解してきました。信仰の内容と倫理という切り口ではあまり考えていませんでした。また考えておきます。

二つ目の質問は現代の問題でして、先ほどは充分にお話しできませんでした。ウンマの理念とシャリーアの関係からイスラームを捉える、どちらかと言うと理論的に捉えるかぎり、現在のイスラーム世界の状況はウンマにとって非常に危機的だと言えます。過去においてもイスラーム世界は複数の国家に分かれて存続してきたのですが、ともかくもシャリーアの施行、シャリーアによる統治が現代よりは基盤にあったように思われます。歴史的に詳細に検討していけば、シャリーアの実効性がどの程度だったのか、理論よりははるかに複雑だろうと思います。しかし、近代になってそれぞれの国家が、植民地支配を受けて独立に至った国もあれば、ともかくもずっと独立を保ってきたトルコやイランもあります。現在のイランといくつかの例外を除いて、大半の中東のイスラーム国家が西洋法を導入しています。またイスラームを国教とする国とそうでない国もあります。国家間の関係として見たとき、ウンマという理念というか実態がどう意識されているのか、私にはよく分かりません。ただ、イスラーム国家同士で、イランとイラクが戦争をし、イラクがクエートへ侵攻するなどの争いがあるのも事実ですが、その反面でムスリムの人びとがはるか遠い地域のムスリムに連帯感を強く抱いていることを目の当たりにしたことは何度かあります。マレーシアのムスリムの学者がエイズ問題で日本でシンポジウムをやっている時に、コソボでムスリムの同胞が苦しんでいるといった発言をしたこともありました。国家の次元で考えるのとは違って、ムスリムたちが互いに同胞と

いう意識や連帯感をもち続けているとすれば、国家間で分断され、小競り合いも絶えないにもかかわらず、どこかでイスラーム世界という意識が生きていることだけは確かなようです。

質問　ムスリムは、非常に綿密なコーランによる指導で信仰がきちっと日常生活に浸透した生活をしているというふうなお話をお聞きしたのですが、どうして一日に5回も、どんなところでもきちんとお祈りができるのでしょうか。われわれは普通大勢の中で自分だけお祈りができる人は少ないのではないかと思います。公衆の面前でも、一人であってもお祈りができるという、そういう強いものの根本にあるのは一体何かとお考えでしょうか。

小田：今の日本のような社会で戒律を守ることは確かに大変でしょう。けれど、中東などイスラーム世界ではむしろ当たり前で、日常生活のリズムの中に、日々の礼拝も、年に一ヵ月間の断食も溶け込んでいると言えるのでしょう。物心がついたときには、周りの大人が礼拝し、断食しているのを見て育つ子供にとって、やがて自分も大人に混じって礼拝を始めることは苦痛や努力の要ることより、もっと自然なことではないかと想像します。そうして子供の頃から身についてしまえば、わりと続くものなのではないでしょうか。私がアメリカにいたとき、イスラーム関係の授業にはインドネシアや中東など各地のムスリムの学生が出入りしていましたし、エジプトのコプトの人もいました。コプトの学生が「明日は祭日だから」と先生に断って授業を休むことがありましたが、お互いに宗教的な義務や行為は堂々と言うし、互いに認め合っていました。日本ではあまり見聞きしないことだったから、印象に残っています。

日本は宗教の寛容な国だと言われていますが、私は最近そうかなと疑問に思い始めています。質問にもありましたように、日本で、お祈りをするから今日の会合は欠席するとか、宗教的に豚や牛肉は食べないということが言いにくい社会ですよね。日本にそういう日常生活に組み込まれたタブーや戒律がほとんどなかったし、異質な宗教を信じる人びととの共存の歴史も浅いから、しかた

ないのかなとも思いますが、信仰が生活の次元で行動を伴うことを日本人はあまりにも知らないし、そういう宗教の人びとが世界にたくさんいることさえあまり意識していない。大学教育まで受けた人が多い日本で、これはやっぱりおかしいのではないかなと思いますね。

それと、話の中でも言いましたが、身体的訓練の力は凄いと思いますね。アメリカでタクシーの運転手が客待ちの時間に道路で礼拝をするわけです。たぶん義務の意識でいやいやするのではなくて、ごく自然に日常生活の流れの中に一日５回の礼拝が身についているのでしょう。信仰の精神の維持といって身構えるより、身体から動いていくのではないかなと思いました。私はごくつまらないことで、そのことに気づきました。草取りです。草を取らないときはどれだけ草が茂って汚くても気にならなかったのに、草取りをし始めたら、よその庭の草が伸びているのが気になり始めて、こんなものかなと思いました。

質問　イスラーム教では、何のために人間は生きているのか教えてください。

小田：何のために生きているか、ですか。これもどう答えればいいのでしょうか。コーランには、神が人間を代理者として創造しようとしたら、天使たちが止めときなさい、私たちが神を崇拝しているし、人間なんて創ったら大変なことになりますよと言った。でも神は、神の方が天使たちよりすべてを知っていると言って人間を創造した。こうも言われていますね。自然は、というか人間以外の被造物はすべて創造されたままで神に帰依しているが、人間だけが神のルールから逸脱したし、しうる存在だと。そこで、人間には改めて信仰することが大事になってくる。まあ、もう一つは将来の終末と来世を信じて今ここを大切に生きること。充分な答えでないかもしれませんが、これくらいしかお答えできません。

司会者　ご質問がまだあるかと思いますが、時間のほうが迫ってまいりましたので、一応ここまでにします。先生のほうでなにか付け加えることがございま

したら。

小田：そうですね。今、人間が何のために生きているかと質問されましたが、イスラームは意外なほど死に関しては淡泊です。日本人にとって死生観や、死をどう考えるかは大事な問題です。これは仏教の影響ですが、歴史上の人物や物語の中でも、親が死んだり、誰かの死を機縁に宗教に目覚めるということは、日本人には何となく分かるわけです。けれど親の死をきっかけに宗教に目覚めるという話はイスラームの世界では通じません。イスラームでは死や病は神の定め、予定として本当に淡々と受けとめられています。日本人にはちょっとびっくりするくらい淡泊です。仏教は生老病死を四苦として捉え、病や死という非日常的な出来事、日常生活が破れた状況の人間を非常に鋭く深く考えてきた宗教です。人間はそうした日常生活が破れることに出会うわけです。誰かが死にかかっているとき、まわりの世界がどうなろうと知ったことか、私に関係がないと思えます。だけど、人間は非日常だけで生きられないのです。必ず人間には健康な日常生活があるのです。イスラームはこの健康な日常生活を過ごす人間を非常によく考えている宗教です。仏教とイスラームの違いはなかなかおもしろいものです。キリスト教はたぶん仏教とイスラームの中間か、どちらの特徴ももっているような気がします。

司会者　どうもありがとうございました。先程お聞きしましたら、先生はシカゴ大学に６，７年ほど留学されていたそうです。その時に比較宗教学についてずいぶん訓練をお受けになられたことをおうかがいしました。先生のお話の中に仏教、キリスト教、ユダヤ教との比較の中でこういうお話をしていただいたということも、その背景にあるのではないかと思います。非常にわかりやすく明快にお話しいただきましてほんとうにありがとうございました。拍手をもって感謝したいと思います。